

## 2021年度 授業改善アンケート集計結果に対する意見

—共通教育研究センター—

センター長 有田 英也

全学共通教育科目は、教養科目、外国語科目、スポーツ・ウエルネス実技科目、IT科目、初年次向けリテラシー科目であるWRD科目、さらに\*キャリアデザイン科目、\*データサイエンス科目、\*教職科目から構成されています。前・後期開講科目の総数367には、のべ17,425人が受講しています。\*をつけた科目群は、それぞれキャリアセンター、データサイエンス教育研究センター、大学教務委員会教職部会が管掌していますが、このレポートは全学共通教育科目の全般にわたる意見です。なお、スポーツ・ウエルネス実技科目は、科目の特性上、別途集計され、本レポートでも別にコメントします。

この367科目のうちアンケート実施必須科目は241科目あり、アンケート実施が任意である科目での実施数を含めて、全295科目でアンケートが実施され、延べ2,773人の回答を得ました。この場を借りて、協力いただいた受講生の皆さんに感謝します。アンケート実施率は、必須科目に限れば90.0%と高い実施率です。授業改善のため、これからも多くの先生方にご協力をお願いします。

ところが、アンケート回答率は15.9%と低調でした。これは2020年度に始まる新型コロナウイルス感染症流行下での不自然な授業形態から、本学が未だに脱し切れておらず、特に全学共通教育科目では、基本的に全ての教養科目講義を遠隔（オンデマンド配信）とし、また2019年度までは受講者各自が教室設置のPCを利用してきたコンピュータ・リテラシー科目群も遠隔に切り替わるなど、本アンケートの受講生に対する訴求力が衰えたからでしょう。アンケートはオンラインで回答・回収されています。対面授業が普通であった2019年度前期と比較すれば、その前期の59.5%、後期の47.9%に対して低い水準にとどまっています。それでも2021年度は、同じコロナ下の2020年度前期23.1%および後期22.8%と比べて低調になりました。授業改善努力が「コロナ疲れ」をきたさないよう身の引き締まる思いです。

ちなみに大学全体の回収率は18.3%でした。不回答率がそのまま欠席率ではないのは言うまでもありませんが、受講生の授業参加度を高める工夫が必要でしょう。

全体を総覧します。まず、遠隔授業の実態を見ましょう。延べ回答者2,773名のうち「対面授業は何回ほど行われましたか？」という問いに「0回」と答えたのは延べ2273名、全体の82.0%でした。これが大学全体では45.2%に過ぎず、しかも「11回以上が対面」という対面復帰を顕著に示す回答が大学全体で31.4%に達したのに対し、全学共通教育科目では6.0%にとどまりました。このことから、全学共通教育における対面復帰の遅れが立証されます。

授業の満足度の指標となる、「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」の平均は、5段階評価で4.37と、同じオンラインだった2020年度前期3.95、後期4.27よりも改善され、対面だった2019年度後期の4.13と比べても好転しました。受講生も教員も遠隔

授業に慣れ、ともに工夫を重ねて来たのだと推測されます。

13個の設問のうちオンライン授業に関わるものから見てゆきましょう。「円滑に授業を受けることができた」という回答の平均値は4.42で、これも高得点を意味する4.0以上です。2020年度後期4.34、同前期の4.06より好転し、「教員との双方向のやりとり(質問への回答や課題の返却等)が十分にあった」は4.08で、2020年度前期3.58、後期3.94より好転しました。

「教員の授業資料は見やすかった」は4.31であり、「教員は遠隔授業のツールを適切に使っていた」も4.39と高得点をあげ、2020年度と比べて総じて改善されました。

4.0以上の評価が12項目の全てに達していますが、これは遠隔授業が急に始まった2020年度前期の3項目を大きく上回り、2020年度後期の11項目を超えます。その理由は徐々に対面復帰を果たす授業に対して受講生が高評価を与えたことにのみ求められるのでしょうか。そうではないでしょう。2021年度前・後期の集計結果は、対面であった2019年度後期の4.0以上の評価8項目、前期の7項目を凌駕しています。引き続き授業改善の努力を続けてゆきたいと思います。

スポーツ・ウエルネス実技では、すでに2020年度後期から一部で対面復帰していました。2021年度前・後期ののべ履修者数は852名で、のべ回答者数は214名、回答率は25.1%です。アンケート実施必須科目52の実施率は90.4%でした。授業の実施状況を見ると、「対面授業は何回ほど行われましたか?」という問いに「0回」という回答はなく、のべ回答者214名のうち88名が「11回以上」と答えています。

本学の開講科目と共通する全12項目の全てで4.0以上の平均値が出ているのは全学共通教育科目全般と同様ですが、スポーツ・ウエルネス実技には、独自に実施した質問項目が二つあります。

「授業で十分に運動することができた」の評価は4.58ときわめて高く、「あなたの健康、体力、生活習慣を見直す機会となった」の4.57とともに、コロナ禍の下で懸念される心身への負荷に、実技がいくらか手を差し伸べられたのではないかと考えられます。というのはスポーツ・ウエルネス実技科目では、「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」が4.68と、全学共通教育科目全般の4.37よりも高かったからです。そして、この授業を通じてどのような資質・能力が身についたかを複数回答で問うたところ、授業形態別の大学全体平均より顕著に良かったのが、「コミュニケーション能力」の30.8%と「協働力」の32.7%であり、一括りに体育と見なされがちな大学におけるスポーツ・ウエルネス実技科目の設計と運用に、いくらか展望が見えてきた気がします。

全学共通教育科目全般に戻りましょう。授業形態には講義、演習、そしてWRDや外国語、コンピュータ・リテラシーなどいわゆる実習がありますが、授業手法について反転授業、問題解決型授業(PBL)の回答率(複数回答あり)は、それぞれ1.3%、0.6%と低調です。

これは本学の授業全体における回答率とさほど変わりません。ただ、プレゼンテーションとグループワークがそれぞれ4.5%と7.4%にとどまり、しかも大学全体の半数以下であるのが、ゼミナールを持たない全学共通教育科目の性格によるとはいえ残念な結果でした。今後、全学的にアクティブラーニングを推進してゆく中で、全学共通教育としてやれること、しなくてはならないことを精査してゆく所存です。

また、受講生が身についたと実感している資質・能力は、いまだ「この分野の知識・学力」が80.2%と圧倒的で、それは大学全体の79.1%と同程度です。しかし、オンラインの2年間を通して、新聞各紙の教育特集で「教える」（ティーチ）から「学ぶ手助けをする」（コーチ）への移行が言われてきたのはもっともなことです。今後は21世紀のリベラルアーツ教育を展望するためにも、「論理的思考力」19.5%、「俯瞰（ふかん）力」12.0%、「課題解決力」9.1%の向上を模索したいと思います。

将来の授業手法について真摯に考え、実践してゆかねばと痛感します。

以上